GENERAL INCORPORATED FOUNDATION BACH GROVE

バッハの森通信

第 166 号
2025年
1月20日発行

一般財団法人バッハの森
〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9　http://www.bach.or.jp
☎ 029-847-8696／Fax 029-847-8699　e-mail：info@bach.or.jp
郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

民衆の愛唱歌コラールを

ご一緒に歌いませんか

新しい年には、ご一緒に「新しい歌」を歌いましょう、とバッハの森の会員の皆様に、いささか謎めいた年頭のご挨拶をいたしました。実は今年2025年は、バッハの森の創立40周年にあたります。今のところ特別な記念行事を考えているわけではありませんが、バッハの森は何を目指して、どのような活動をしているのか、広く皆様にお知らせして、より多くの方々をバッハ森にお招きしたいと思うとともに、「新しい歌」について一言説明したくて、この文章を書き始めました。

＊　＊　＊

去年7月末に開いた「夏のワークショップ」が、ヤン・エルンストさんとマインデルト・ツヴァルトさんを久しぶりにドイツから迎え、大勢の方々とともに、楽しい集いを開けたことは「バッハの森通信」第164号で報告しました。同様に去年12月15日と22日に開いた「クリスマス・コンサート」と「クリスマスの音楽会」も、本号の「リポート」欄で4人の方々が報告しているとおり、参加した人たちがみんな大いに楽しんでくださったことを知り、大変嬉しく思いました。みんながハッピーになる、これこそバッハの森が目指している活動目標ですから。

とは言っても、バッハの森に集まった皆さんと40年間追い求めてきた音楽が、そう容易に日本の全ての皆さんに面白いと感じていただけるとは思っていません。確かに、私たちのテーマはバッハの音楽なのですが、バッハと聞いて多分多くの方が思い浮かべるのは「ニ短調のトッカータ」のような音楽ではないでしょうか。しかし違います。私たちのテーマは、バッハの音楽の素材になった「コラール」なのです。と言えば、コラールって何ですか、と質問なさるでしょう。

短く答えると、バッハに先立つこと約200年前に宗教改革者マルティン・ルターが作り始めた、分かりやすい歌詞で歌いやすいメロディーのドイツ人民衆のための宗教歌です。それ以来、コラールは民衆の愛唱歌となり、宗教改革運動を広める一助となりました。ルターの活動を批判していたある人が「（ルターの本拠地）ヴィッテンベルクのうぐいすにやられた」と言ったと伝えられています。それからバッハの時代まで、多数の優れたコラールが作詞作曲され、コラールに基づく器楽曲、例えばオルガン曲、声楽曲、例えばカンタータなどが作曲されました。

＊　＊　＊

ルターは今から500年前、バッハは300年前の人ですから、彼らが作ったコラールは、19世紀以降のキラキラ輝く音楽を聴きなれている耳には古風に聞こえるかもしれません。しかし、私が年賀のご挨拶でご一緒に歌いましょうと呼びかけた「新しい歌」は、「主に歌え、新しい歌を、主の救いの良い知らせを伝えて」（詩篇96篇1～2節）のような、聖書が語る歌のことなのです。これは、二千数百年前にバビロンに捕囚され、民族絶滅の危機に直面していた人々が、思いがけず捕囚から解放されて故郷、エルサレムに帰ることが出来たとき、それが神の不思議な救いの業だと思った詩人の歌なのです。

いずれにしてもコラールの歌詞は、聖書の引用かパラフレーズです。と言っても、説明にならないことは分かっています。聖書は日本では一般にほとんど知られていない書物ですから。しかしバッハの森は教会ではありませんから、先ず聖書の講義をするわけではありません。一緒にコラールを歌いませんか、とさそいます。そして繰り返し歌っている間にコラールのメロディーが自然に聞こえてくるようになります。音楽の不思議な力です。それとともに、コラールを素材としてバッハが作り出した素晴らしい音楽が聞こえてきます。バッハの森は、このようなコラールに興味を持つ皆さんのご参加をお待ちしています。　（石田友雄）

神に栄光、地に平和

天使と一緒に「天使の讃歌」を歌おう

＊このメディタツィオは、2024年12月15日に開かれた「クリスマス・コンサート」で朗読した原稿を修正した文章です。

異邦人の救い主

キリスト教会の1年は「降誕祭」すなわち「クリスマス」の前の四つ目の主日から始まります。この日からクリスマス前日までの約4週間を「アドヴェント」“Advent”、日本語では「降臨節」、或るいは「待降節」と呼びます。語源“advenio”は「近づく」という意味で、イエス・キリストの誕生日（12月25日）を記念して準備すると同時に、終末、すなわち、世界の終わりに再臨するキリストを待望し、近づいて来られるキリストに向かって「来てください」と願う期間です。

本日、アドヴェントのコラールとこのコラールに基づいてJ.S.バッハが作曲したカンタータ：“Nun komm, der Heiden Heiland”「さぁ、おい出ください、異邦人の救い主よ」を演奏します。その内容を理解するために、二つのキーワードについて考えます。

第一は「異邦人の救い主」“der Heiden Heiland”、第二は「処女(ｵﾄﾒ)の子」“der Jungfreuen Kind”ですが、先ず「異邦人」について考えましょう。イエスもイエスの最初の弟子たちも、古代イスラエルの信仰を継承するユダヤ人でした。彼らの信仰によると、世界中の諸民族は、彼らが「主」と仰ぐ真(ﾏｺﾄ)の神に選ばれ、主と契約を結んだ民族、すなわち「選民」と、それ以外の諸民族、「異邦人」に分類されます。実際には、選民の後継者であるユダヤ人と他の諸民族のことで、その相違は、選民に与えられた律法を守るかどうかにかかってると考えられました。

律法の基本的な定めは、「唯一の神を信じること」或いは「人を殺してはいけない」というような分かり易い簡潔な定めですが、その後、律法学者と呼ばれる人々により、次々と細かい規則、例えば、「安息日を守れ」という律法には、安息日には、あれをしてはいけない、これもしてはいけないというような細かい規則が付け加えられました。ところが、ナザレのイエスは、何が律法の精神かということを自由に主張して行動した方でした。例えば、病気に苦しんでいる人を見て憐れみ、その日は安息日でしたが癒やしてやると、律法学者たちは、安息日の律法を破ったと非難しました。するとイエスは、律法学者たちに向かって、人は安息日のために存在しているのではなく、安息日は人のために存在しているのだと教えました。

メシア（キリスト）

こうして、人の命を何よりも大切にするイエスの教えと生き方に感動した民衆が、イエスの周りに大勢集まるようになり、そのことを快く思わなかったユダヤ人の指導者たちは、彼を異端と決めつけ、ユダヤとガリラヤを支配していたローマ人に、彼にはローマの支配に謀反する恐れがあると訴え出たため、彼は逮捕され裁判にかけられ、十字架刑によって処刑されました。

ところが、それまでイエスの教えと行動の本当の意味を理解せず、彼が十字架にかけられたときには逃げ散ってしまった弟子たちが、ナザレのイエスこそ、ユダヤ人の言葉ヘブライ語で「メシア」、当時の世界共通語ギリシャ語で「キリスト」、すなわち救い主だと悟り、彼らが悟ったことを周囲の人々に語り始めました。この不思議な現象を、彼らは「復活したイエスに出会ったから」と説明しました。後に「キリスト教」と呼ばれるようになる、イエスの弟子たちの宣教活動は、彼らの出身地ガリラヤや本国ユダヤにとどまらず周辺諸国にまで及び、その結果、ユダヤ人だけではなく、ユダヤ人が異邦人と呼んで差別していた人々も大勢入信しました。彼らもまた差別されている人々にあえて近づき、人の命を大切にするイエスの教えと行動に感銘を受けたのです。最初、彼らは「異邦人キリスト者」と呼ばれました。

ところが、宣教活動をしていたイエスの弟子たちの間で、異邦人にも、ユダヤ人が守る律法の定めを守らせるべきかどうか、という問題が生じました。弟子たちは会議を開き、大いに議論をした後、律法に関するイエスの自由な姿勢を継承して、大切なことはイエスを救い主と信じる信仰であるという結論に到達しました。

ここで、ルターがコラール：“Nun komm, der Heiden Heiland”を、アンブロシウスのラテン語聖歌：“Veni redemptor gentium”

「来たれ、異邦人の贖い主よ」によって作詞したことに注目します。アンブロシウスは、4世紀末のミラノの司教で、キリスト教の生成期に、重要な役割を果たした神学者です。

彼が活動した時代を知るためには、その前数百年の歴史を知る必要があります。先ず紀元70年前後と130年前後に、二度にわたってローマ人の支配に対するユダヤ人の大反乱が起こりました。二回とも、一時、ユダヤ人はエルサレムからローマ人を追い払うことに成功しましたが、結局はエルサレムを奪回したローマ人が反乱の根源とみなしたエルサレム神殿を破壊し、ユダヤ人のエルサレム立ち入りを禁止して、大迫害を始めました。当然、イェスを救い主と信じるユダヤ人や異邦人キリスト者もユダヤ人の一派と見なされて、厳しい迫害を受けました。

しかし3世紀から4世紀初頭までに、ローマ帝国内の政治的混乱などもあり、それまでに異邦人キリスト教徒が大勢を占めて成立していたキリスト教会の影響が、帝国の隅々にまで浸透していたため、帝国の支配者は弾圧を止めてキリスト教を公認しただけではなく、ユダヤ人をキリストを十字架にかけた人々の子孫とみなす教会の神学を利用してユダヤ人迫害を続けました。このような、ローマ帝国支配者の政治的判断から起きたユダヤ人とキリスト教徒の分断が、その後ヨーロッパのキリスト教徒のユダヤ人迫害の不幸な歴史の発端となったのです。

アンブロシウスが活動したのは、それから100年も経っていない時代でした。彼はローマ帝国高官の家の出身で、洗礼を受けてキリスト教徒になったのは、30歳を過ぎてからでした。このような状況下に彼はあえて自分が異邦人であったことを強調して、“Veni redemptor gentium”「来たれ、異邦人の贖い主よ」を作詞したと思われます。異邦人を差別しなかったイェスこそ自分の「救い主」であることを告白したかったのではないでしょうか。

「処女（ｵﾄﾒ）の子」

先程、アドヴェント第一主日の福音書として、マタイによる福音書21章1～9節を朗読しました。何とこの福音書は、受難節第六主日、すなわち、一般にパルマールム（棕櫚の日曜日）と呼ばれる日の福音書に他なりません。それによると、柔和な王として雌ろばにまたがってエルサルムに入って来られたイェスを、群集が棕櫚の木の枝を道に敷いて歓迎して叫びました。「ダビデの子にホサナ。祝福されよ、主の御名において来たる者は。いと高きところにホサナ」。この時、群集はイェスをメシアとして歓迎したのです。しかし、この日に受難節が始まり、その5日後にイェスは十字架上で息絶えました。従って、この福音書には、信仰者たちが「来てください」と願ったイェス・キリストの真の姿が示されているのです。すなわち、自分の血を流して世界の人々を贖うために天からこの世に降って来られた方です。

「処女(ｵﾄﾒ)の子」と、コラールが省略して伝える状況を、ルカによる福音書の降誕物語によって補うと、処女(ｵﾄﾒ)マリアに現れた天使ガブリエルが「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを覆う」と告げると、マリアは「私は主の仕え女(ﾒ)です。お言葉どおり、この身になりますように」と答え、「いと高き方の子、イェス」をみごもりました。要するに、イェス・キリストは人の女性から人として生まれた方だが、彼の本質は天の王国の王である父なる神の独り子である、という信仰を語っているのです。

こうしてアドヴェントの間、約4週間、「来てください」と熱心に願った叫びに父なる神が応えてイェス・キリストは降誕したと伝える降誕物語のクライマックスは、彼が生まれた夜、羊飼いたちに現れた天使の大軍の讃美になります。「いと高きところにいます神に栄光があるように。地には平和が御意志(ﾐｺｺﾛ)にかなう人々にあるように」。さぁ私たちも天使の大軍に参加して、「天使の讃歌」を一緒に歌いませんか。2000年前に、アドヴェントからクリスマスにかけて展開する降誕物語を生み出した、復活したイェスと出会った人たちの感動を味わうことができるかもしれません。（石田友雄）

クリスマス・コンサートで再確認

バッハのカンタータを歌うということ

バッハの森のコンサートには定型があります。まず「テーマ」が決まっています。春は受難か復活、初夏はいろいろ、冬は待降節かクリスマスに関わったテーマが選ばれます。その理由は、教会歴に沿ったコラールを引用して、バッハのカンタータが作曲されているからです。従って、選ばれたコラールがプログラムの土台になっています。

プログラムはハンドベルの点鐘で始まり、多くはテーマ・コラールの編曲のオルガン演奏、教会歴により各日曜日に定められている福音書の朗読、ミサ曲より「キリエ」と「グローリア」の合唱（ときに「クレドー」、「サンクトゥス」、「アニュスデイ」までミサ全曲の合唱）、石田友雄先生による当日のテーマについての解説、そしてハンドベルのコラール合奏に続いて参加者全員がオルガン伴奏でコラールを斉唱します。これがバッハの森のコンサートの特徴です（個人的にはこの部分が一番好きです）。これだけの準備をした後で、最後に演奏されるのがバッハのカンタータです。

2024年のクリスマス・コンサートでは、カンタータ61番「さぁ、おいでください、異邦人の救い主よ」という待降節第一主日のためのカンタータが演奏されました。この曲は、マルティン・ルターが作詞、作曲した同名コラールを引用した音楽ですが、このコラールは「救い主とはどういう方なのか」ということと、その方への「どうか来てください」という願いを全8節を用いて歌います。

冒頭の合唱は、ルターのコラール第1節をそのまま用い、「フランス風序曲」の体裁をとった音楽がつけられています。これは付点音符を多用した緩徐部と速い三拍子のフーガの緩急緩からなり、当時のフランス歌劇において「王の登場」の音楽とされていた形式でした。ここで「王」が救い主イェスであることは言うまでもありません。第2曲のテナーのレチタティーヴォは、来たる救い主がもたらす恩恵を褒め称えます。音楽の後半はいわゆる「アリオーソ」になっていて、声と通奏低音が優しく絡み合い、救い主の愛の深さを表しているようです。第3曲は前曲を受けて、イェスが自分たちの教会に来られて祝福を与え給うことを願います。音楽は9/8拍子の舞曲、いわゆる「ジーグ」になっていて、信徒の喜びを直接表現しています。第4曲のバスのレチタティーヴォは、一転して、弦楽器のピッツィカートに載せてイェスご自身が、信徒の「心の扉」を叩き、晩餐を共にしようと呼びかけます。ノックの音を表す弦楽器の静かな響きは極めて劇的な効果を生みます。そして第5曲のソプラノのアリアは、そのイェスの呼びかけに応え「開け、我が心よ」と歌うのです。自分がいかに塵芥のごとき価値のないものであっても、イェスは来てくださる。通奏低音のみで歌われるこの歌は、イェスを迎え入れる信徒の内面的静かな喜びを感動的に表現しています。終曲の合唱は、「いかに明るく輝くか、暁の星よ」という別のコラールの第1節後半を歌詞にしています。ここでも“Komm”「来てください」という言葉が何度も繰り返され、ヴァイオリンの対旋律が信徒の浮き立つような喜びを強調します。

以上、長々と語って来ましたが、申し上げたいことは、「バッハのカンタータにおいては歌詞と音楽が密接かつ見事に結びついている」ということです。そしてバッハのカンタータを演奏する、乃至は聴くことは、この素晴らしいアマルガム（合金）を味わうことに他なりません。

バッハの森ではしばしばカンタータの合唱だけ歌い、中間のレチタティーヴォやアリアを省略するか、その歌詞を朗読するだけで演奏されてきました。今回、久しぶりに第4曲を除く全曲を音楽付きで演奏することができました。なお第4曲のバスのレチタティーヴォは、音楽だけを別に演奏し、その後で歌詞（聖書のイェスの言葉）を朗読する形で演奏されました。そうすることにより、改めてバッハのカンタータを歌うということの意味を再確認できた気がしました。

最後に、この演奏を一緒にしてくださったソプラノの鈴木紀美子さん、テナーの小沼俊太郎さん、弦楽器の大橋麗美さんと鳥生真理絵さん、そしてすべてをアレンジしてくださったオルガンの宮本とも子先生へ深い感謝の意を表しこの報告を終わりたいと思います。（深谷律雄）

不安を超えて到達した

クリスマス・コンサートの喜び

2024年・秋のシーズンのクワイア（混声合唱）が始まる前、私は不安な気持ちで一杯でし

た。なぜなら、30年以上もバッハの森クワイアを引っ張り、個人的にもお世話になった指揮者が、3月末にご家庭の事情で勇退され、4月から私たちのクワイアは指揮者が不在だったからです。幸い7月末に私たちの古い友人のヤン・エルンストさん（オルガニスト、指揮者）とマインデルト・ツヴァルトさん（カウンター・テナー）が、久しぶりにドイツから来てくださることになり、彼らを迎えて「夏のワークショップ」を開くため、私たちは曲目を決め、必死に自主練習をしました。「夏のワークショップ」が多くの参加者を集め、大変楽しい集いになったことは、「バッハの森通信」第146号で報告した通りです。それにもかかわらず、9月になると「良い羊飼い」を失った喪失感はいよいよ募り、カンタータ第6番「私たちの許に留まってください」のメロディーが頭の中でいつも響いている有様でした。

ともかく秋のシーズンはクリスマス・コンサートを目指して練習することになり、課題曲はT.L.de　ヴィクトリアの「ミサ：おぉ偉大な神秘」より「キリエ」と「グローリア」、J.S.バッハのカンタータ第61番「さぁ、来てください、異邦人の救い主よ」になりました。しかしクワイアのメンバーは7人、皆さん多忙な方々で4声揃うのが困難な有様、これでコンサートが成り立つかどうかとても心配になりました。このような心配をよそに、石田友雄先生と宮本とも子先生は、アリアのソリスト2人と弦楽器奏者2人に声をかけて、ゲネプロとコンサートに出演していただく約束をしてくださいました。

そうなると私たちは、ミサとカンタータの合唱部分を仕上げなくてはなりません。私は“Nun　komm”のコラール旋律が大好きで、カンタータ第61番も歌ったことがありますが、いざ練習を始めてみると、第1曲途中で三拍子に変わり、“des sich wundert alle Welt”「全世界は驚く」と各パートが怒濤のように歌い継ぐ部分になるととても難しいことを思い出しました。とも子先生はオルガンにつきっきりで音程やテンポを直してくださり、岩渕倫子さんは発声や出だしのタイミングを指導してくださり、他のメンバーも意見を出し合いながら、指揮者なしのクワイアの練習を進めることができました。

11月に横浜で開かれた、ベルリンRIAS室内合唱団の練習風景を公開するワークショップに参加しました。合唱曲を3曲を学びましたが、縦の線が合わなかったり、バランスが乱れると、指揮者が指摘して、Yo～Yo～と皆で歌い、他のパートの確認をしたり、全員でテキストのリズム読みをしましたが、このような練習方法には、本当に驚きました。バッハの森クワイアが昔からやってきた練習方法と同じだったからです。とても嬉しくなりました。

いよいよ、ゲネプロとコンサートの日になりました。ソプラノ・ソロに鈴木美紀子さん、テノール・ソロに小沼俊太郎さん、ヴァイオリンとヴィオラに大橋麗美さんと鳥生真理絵さん、そしてオルガンに宮本とも子先生をお迎えして演奏が始まりました。ソリストと楽器演奏者の皆さんは、ミサを含めてカンタータの合唱部にも参加してくださり、クワイアの歌声がビシッと締まりました。ハンドベルの点鐘で始まり、「キリエ」「グローリア」と進み、福音書朗読、ハンドベル演奏、全員でコラール斉唱、カンタータの演奏、オルガン演奏とJ.S.バッハの合唱曲“Wir singen dir in deinem Heer”「私たちは御使いの群れとともにあなたに歌います」、そしてオルガンの後奏があって最終的にいつものバッハの森のコンサートになり安堵しました。2025年は“Dona nobis pacem”「私たちに平和を与えてください」と何度でも唱えたい気分です。（三縄啓子）

＊　　＊　　＊

温かい雰囲気が満ちた

クリスマスの音楽会

バッハの森のクリスマスは、とても素敵です。深く包まれるような温かさがあります。木の建物のぬくもり、それを照らす優しい光、丁寧に仕上げられた上品で美しいクリスマスの飾りなどが、手仕事のぬくもりを伝えてくれます。また世界各地から集められたクリッペ（キリスト降誕の模型）が造り出す小さな世界が、無限の物語を語りかけます。これらの展示が、空っ風の吹き抜ける寒くて暗いつくばの風景さえも、いとおしく変えていくのです。

ここにお客様を招き、この空間が人々で賑わい、ここの温かな空間を分かち合えるクリスマスの音楽会を開こうと決めたのは、夏のある日のことでした。比留間恵さんのサポートを受けて企画を練り、どのようにしてお客様に楽しんでいただけるプログラムを作れるか、いろいろ悩みながら考え、宣伝も力を入れて行った結

果、予約申込みがどんどん入り、キャンセル待ちの人が日増しに増えるほどでした。

2024年12月22日、いよいよ本番の日を迎え、ぞくぞくとお客様が集まりました。サンタの衣装を身に着けた可愛いらしい子どもたちもいて、奏楽堂の座席は一杯になりました。

最初にハンドベル・クワイアが「もろびとこぞりて」を演奏して幕を開けました。続いてリード・オルガンの演奏で、フランスのノエル「歌え、踊れ、喜んで」が流れてきました。エキゾチックな雰囲気がただようメロディーとともに、会場の明かりがすこしずつ暗くなり、会場の雰囲気もクリスマスのムードになっていきます。

薄暗い照明の中、スライドが点灯し、いよいよ絵本のセクションがスタートです。トミー・デ・パオラが書いた絵本をスライドで映しながら、お客様に楽しんでいただくことにしました。伝統的なクリスマスのお話しが、簡潔に分かりやすくまとめられています。飛び出す動く絵本なので、子ども心をくすぐります。

最初は受胎告知の場面。子どもと大人のハンドベル・クラブであるリンガーズの子どもたちの可愛いらしい声の朗読の後に、中世の歌が収められている「モンセラートの朱い本」の中から、「声、合わせて歌おう」という受胎告知の場面を歌詞にする歌の演奏です。徐淑子さんが選曲してくださいました。独特のリズムの古風な響きの曲調に、皆さん聴き入っていました。

羊飼いにお告げがされる場面では、リコーダーとリード・オルガンで、テレマンの「パストラーレ」が演奏されました。牧歌的で美しいアンサンブルに子どもたちもうっとりと心地よさそうに聴ていました。そしていよいよ物語のクライマックス、救い主の誕生の場面では、元気に登場したリンガーズの皆さんが、「お生まれだ、イエス様が」というフランスのキャロルを演奏しました。編曲も変化に富んでいて面白く、テーマのメロディーが次々と展開していきます。秋から本格的に親子で参加している新しいメンバーも含むチーム全体で息の合った見事な演奏をしました。

クリスマス物語のセクションの後は、名画の「謎解き」です。ルネサンス期の「東方の三博士」の絵を見ながら、謎解きではイエスが世界中の人々が待ち望んでいた赤ちゃんであることを解き明かされました。シールを貼りながら、三人の王様を見つけ出す活動を取り入れたら、未就学の小さな子どもたちも、一生懸命、絵に向き合って目を皿のようにして王様たちを探す様子が見られ、ほっとしました。

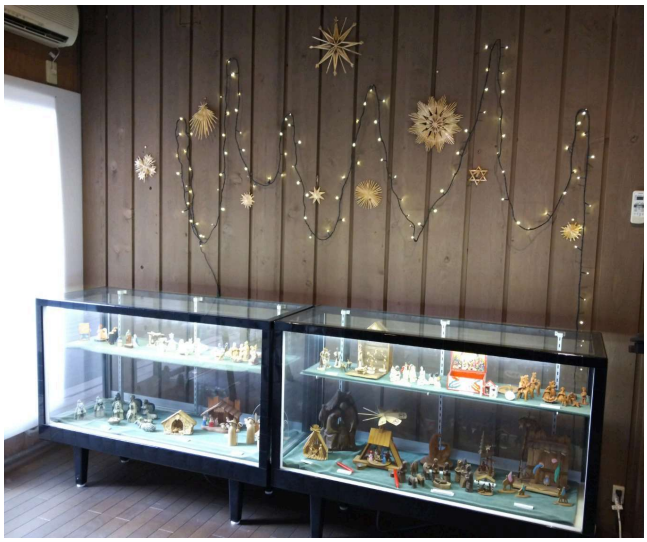
最後に比留間さんの指揮で三人の王様を歌うキャロル、「東の国から」を、お客様も一緒にみんなで歌い、その伴奏はリンガーズが担当し、大人も子どもも皆で声を合わせて歌って幕を閉じました。サンタやトナカイは登場しませんでしたが、バッハの森らしい温もりの溢れるクリスマスを皆さんに楽しんでいただけたと思います。（別所香苗）

静かな喜びに包まれた

クリスマスの音楽会と祝会

12月22日に開かれた「クリスマスの音楽会」は、バッハの森らしい、それでいて、クリスマスのお話を絵本で紹介するという、とても新しい形の楽しい形のプログラムでした。今年が2024年だということは、イエス・キリストが誕生されたときから数えた年数だというお話が長い巻紙によって説明されました。ハンドベルの演奏、時代を超えた喜びの歌声、リコーダーとリード・オルガンの美しくのびやかな響きなどを聴きながら、クリスマス物語の世界に引き込まれていきました。その後の謎解きタイムには全員が夢中になって答えを探し、見つけた人は次々と手を挙げていました。

音楽会終了後に祝会が開かれました。パイプ・オルガンの音色に心が満たされ、最後にリード・オルガンの伴奏で、皆でキャロルを歌って終わりました。クリスマスの静かな喜びに包まれた音楽会と祝会、とても良い一年の締めくくりになりました。（横田博子）



日　誌（2024. 8. 1～9. 30）

〔 〕：バッハの森以外の主催者の行事

10. 2　掲載　筑波大学新聞第384号3頁。
「バッハの森で合唱披露
教会音楽の背景学び」
（夏のワークショップの紹介記事）
10. 3　運営委員会　参加者4名。
10. 13　訪問　富田一樹氏（オルガニスト）
村尾あき子氏
12. 6　〔聖心女子大学キリスト教文化研究所
教養ゼミナール：パイプオルガンの
魅力に触れる〕
12. 12,13　クリスマス飾り付け　参加者2名、6名。
12. 15　クリスマス・コンサート　参加者38名。
（聴衆22名、出演者16名）
12. 22　クリスマスの音楽会　参加者60名。
（聴衆：大人26名、子ども：18名、
出演者16名）
クリスマス祝会　参加者14名。
12. 23～ 2025. 1. 6　冬期休館

コラール・カンタータ入門

10. 5　カンタータ：J.S.バッハ「誉め称えよ、
主を、栄光の力強い王を」（BWV 137）
コラール：ネアンデル「誉め称えよ、力強き
主を」
オルガニスト：宮本とも子、参加者9名。
10. 19　カンタータ：J.S.バッハ
「神がなさること、それは善くして
くださること」（BWV 99）
コラール：S.ローディガスト
「御神の御業はことごとく善し」
オルガニスト：宮本とも子、参加者7名。
11. 2　カンタータ：J.S.バッハ「主キリスト、神の
独り子」（BWV 96）
コラール：E.クロイツィガー
「主なるキリスト、神の御子は」
オルガニスト：安西文子、参加者5名。
11. 16　カンタータ：J.S.バッハ「目覚めよと声が
私たちを呼ぶ」（BWV 140）
コラール： J.フランク「起きよ、
と呼ばわる」
オルガニスト：金谷尚美、参加者10名。

学習コース

バッハの森クワイア　10.5／8名、10.12／6名、
10.19／4名、10.26／4名、11.9／5名、
11.16／7名、11.30／7名、12.7／9名、
12.14／12名、12.15（コンサート）／
12名（クワイア7名＋ソリスト5名）。
オルガン音楽研究会　10.4／6名、10.18／4名、
11.15／7名、10.18／4名。
オルガン・クラブ　10.11／3名、
10.25／2名、11.22／1名、10.18／4名。
歴史書・聖書入門10.5／6名、10.12／5名、
10.19／5名、10.26／4名、11.2／5名、
11.7／5名、11.16／7名、11.30／5名
バッハの森ハンドベル・クワイア　10.5／6名、
10.19／6名、11.9／6名、11.16／6名、
12.7／7名、12.14／7名、12.15（コンサ
ート）／3名、12.22（音楽会）／7名。
ハンドベル・リンガーズ
10.27／8名、11.17／9名、12.1／9名、
12.22（音楽会）／7名。
オルガン・レッスン　10.18／2名。
チェンバロ・レッスン　10.31／5名、11.15／
4名。
オルガン、チェンバロ練習　10.4／1名、
10.5／2名、10.10／2名、10.11／4名、
10.18／2名、10.19／1名、10.24／1名、
10.25／2名、10.30／2名、11.1／1名、
11.2／1名、11.7／3名、11.8／2名、
11.13／2名、11.14／3名、11.15／3名、
11.16／1名、11.19／1名、11.21／1名、
11.22／1名、11.27／1名、11.28／1名、
12.4／1名、12.6／1名、12.7／1名、
12.14／1名、12.15／1名、12.19／1名、
12.20／1名、12.22／3名、12.26／1名。